

「画題」を通して理解する日本文化 画題受容拠点としての京都

「WEB版画題辞典」(仮称)構築のための総合的研究

プロジェクト代表: 中本 大(立命館大学文学部助教授)

研究代表者 中本 大(立命館大学)

共同研究者 信多純一(大阪大学名誉教授・神戸女子大学教授)・木村重圭(甲南女子大学)・
林進(大和文華館)・藤田真一(関西大学)・塩崎俊彦(神戸山手大学)

(以上、「画題辞典」推進班)

研究協力者 堀川貴司(国文学研究資料館)・北野良枝(東京藝術大学)・

住吉朋彦(慶應義塾大学ス道文庫)・綿田稔(東京国立文化財研究所)

小助川元太(国立呉工業高等専門学校)

(以上、『後素集』校本作製推進班)

abstract:The main purpose of this research is to trace the aspects of Japanese cultures in "the subjects of the paintings". Concretely, this research aims at not only just understanding the whole images of "the subjects of the paintings" and contributing directly to the humanity science research starting with art and literature but also opening the "cultural references" on the website with the purpose of obtaining the essential knowledge cultural historically as history, literature, and art.

1、研究計画

1 - 1、「画題」概念の確定 日本のもの、日本人の視点の独自性を解析するための糸口として。

1 - 2、「画題辞典」構築の諸条件

規模.....蘭画等を除く本邦近世以前の画題のすべてを収録する大辞典(「事典」の方が適当か)。

対象.....漢画・大和絵・風俗画・物語絵(含、説話・伝説・戯曲)・宗教画等。

構成.....五十音順。大項目・中項目・小項目。索引機能の充実。

記事.....画題・よみ・解説(出典・背景・絵柄・展開等)・有名作例・キーワード・関連項目・参考文献。記事字数には制限を設け、検索の便宜を図る。

索引.....画題・書名・キーワード・逆引き機能の充実。

キーワード.....人物・動植物・器物・姿態等「図像」に関するもの、また故事・説話・出典等

「背景」に関する特徴的なもの数項目(項目数の上限は規定する)。

1 - 3、項目担当の執筆・入力

金井紫雲編『東洋画題総覧』をベースに作業。完成後の総項目を常に念頭に置きつつ、各自、担当分野の画題を選択。次に、現在参照可能な図像との照合を行う。その上で担当者は 画像番号 画題(よみ) 出典資料(体裁) 絵師 製作年代 図像キーワード(数個) 『東洋画題総覧』への採録の有無 展覧会図録・既刊資料・売立目録などから採した取画像を貼付したファイル名(JPG) 備考データの各項目を入力、A作成者B出典番号C画像番号を明記して、サーバーに保存、データを相互に参照、利用する。

ファイルの作成にはファイルメーカーPRO6(FileMaker, Inc.)を使用。

2、作業上の問題点

2 - 1、担当分野により、画題の確定にレベル

の差異が生じること

大中小各項目確定のための必然的
試行錯誤。

「風景画・名所図 八景図(瀟湘八景)
近江八景・江戸八景」

2 - 2、画題意識を検討しやすい漢画(室町水墨画)系画題及び近世絵手本類の重点研究

『後素集』(近世初頭・狩野一溪編)諸本の
検討と校本の確定。巻三「羅漢祖師」まで終
了。

近世絵手本類の調査検討の実施。『国書
総目録』(岩波書店)未掲載のものが多く
蔵される関西大学総合図書館所蔵近世
絵画資料及び、東京芸術大学・東京国
立文化財研究所所蔵の「探幽縮図」・「常
信縮図」を重点的に調査検討している。
絵手本類については仲田勝之助著『絵
本の研究』及び展覧会図録『近世日本絵
画と画譜・絵手本展』(町田市立国際版
画美術館)所載のデータを基準とする。

3、今後の展開及び研究方針

3 - 1、集積データの公開方法については、
CD-ROMによる配布またはHPでの公開を
模索。

3 - 2、図像公開に関わり、所蔵各機関へ配
慮をどうするか。

3 - 3、学術利用に制限することの妥当性の
検討。

3 - 4、「見立て」「判じ絵」「謎絵」の解析等、
文学的・文化史的欲求をどのように満たし
ていくか。

参照1 具体的な事典項目の入力例(草稿。こ
の体裁から大・中・小各項目を確定)

竹林七賢

『東洋画題総覧』では次のように記される。すな
わち、「支那魏晋交代の間に於て、国難を避け、
竹林に会して清談を事としたる七人の隠士をい
ふ、曰く阮籍・嵇康・山濤・向秀・劉伶・王戎・阮
咸(阮咸は阮籍の兄)此の中、独り山濤のみは後
に竹林を出で、後晋の武帝に仕へて吏部尚書と

なり、選挙の事に與り、所謂山公啓事を遣した。

竹林七賢を描いた名作

狩野元信筆	帝室御物
同	京都片山儀兵衛氏蔵
同	京都聚光院蔵
雪舟筆	浅野侯爵家蔵
雪村筆	原富太郎氏蔵
同	牧野子爵家蔵
狩野松栄筆	小笠原伯爵家蔵
狩野探幽筆	鍋倉直氏蔵
円山応挙筆	讃岐金比羅宮蔵

戸田禎佑が「漢画系人物図屏風の輪郭」(『日
本屏風絵集成 四 人物画 漢画系人物』講談
社・八一年)で記したように、本邦における画題
「竹林七賢図」では七賢個々の描き分けにはほと
んど執着することなく、七人の隠者と竹林を配す
ることのみが主眼である、と一般的に考えられて
きた。確かに、東博蔵伝元信筆「商山四皓・竹林
七賢図屏風」を始め、特徴に乏しい作例が多い
ことは確かである。それは逆に画題「竹林七賢
図」を確定することの困難さにも繋がっていること
は、林進氏が論考「雪村筆「竹林七賢図」(畠山
記念館所蔵)について」(前掲書所収)で述べら
れるとおりである。しかし近年、北野良枝氏により
妙心寺塔頭天球院上間一の間に描かれた狩野
山雪筆「七賢図」が、七賢個々の個性を尊重した
描写であることが報告された(『國華』一二五三
号)。氏の考究によると、山雪の構図は狩野一溪
編の画題集成『後素集』巻第二・隱逸部所収「晋
七賢図」の記述に一致するという。『後素集』の記
述は以下の通りである。

晋七賢図

晋ノ嵇康伝、与康交者阮籍、山濤、向秀、劉
伶、阮咸、王戎、為竹林ノ遊、所謂竹林七賢是
也。(詩学大成有之)

嵇康字齊夜、好ヲトコナリ、琴ノ上手。

阮籍字嗣宗、弹琴、亦七月七日以竿挂大
布犢鼻袴曝庭犢鼻ハナリ、好男也

山濤字巨源

向秀字子期、伯牙琴ヲ聞タル人ナリ

劉伶字伯倫、常乘鹿車、愛酒

阮咸字仲容

王戎字濬仲、視日不睡、日向テマダキヲセストコト也。

此七賢内山濤ト王戎八意カワリシテ竹林ヲ去也、此後ハ残り五人ヲ五君ト云也。

一溪は七人それぞれの字号を始め、関係する故事をも積極的に採録している。向秀の字を「子期」と記し、断琴の故事で著名な「鍾子期」と混同するような誤りはあるものの、こうした理解を踏まえ山雪は鹿車に乗る劉伶を描き、竹林から去る二人を描いていることを北野氏は指摘している。

実際、『後素集』の記述は「七賢」画題確定に関しても幾つかの問題を提起してくるのである。第一に末尾に記される「五君」についてである。常識的に考えて、「竹林七賢図」を認定する最大の根拠は「七人の人物」であろう。しかし、二人を欠く「五君」が七賢の変奏として認知され得ることを忘れてはならない。室町後期の禅僧、琴叔景趣の七絶「扇面七賢」には「此中真隠五君足、莫把三山一樣看」とあるのを始め、季弘大叔の「題竹林七賢図」で顔延之の五君詩を引用することからも「五君」の概念は禅林においても定着していたことが確認されるのである。なお、七人の中、山濤のみが去ったとする『画題総覧』の記述が何に依拠しているかは不明である。画面に描かれる人数の問題をめぐっては『後素集』の記述以外にも留意しなければならない事例がある。林氏の論考で既に引用されている室町時代中期の禅僧、天隠龍沢の画賛「竹林七賢軸 旁布瀑布」(『翰林五鳳集』所収)を参照されたい。二幅対の一幅が奪われ、残された一幅を詠じた七絶である。

若道七賢言似誣 此中屈指四人無

飛流直下銀河水 認作廬山三笑図

その措辞から、画面に描かれた三人を七賢に見立てる経路が忖度されるのである。禅林にあつては、「商山四皓図」でも「四老惟三少一人」(希世靈彦「商山四皓図 惟有三人」)という構図が確認でき、人数や名数によってのみ画題を確定することの危険性と困難さを示すものともなっている。『後素集』では名数「七」にちなむものとして、「七賢」(伯夷・叔齊・虞仲・夷逸・朱張・少連・柳下惠、「晋七賢」の「隠」に対する「逸」)及び「七

才子図」すなわち建安七子を挙げている。雪村筆「七隠士騎馬野遊図」等、七人の人物が配される野遊図は元来、「竹林七賢」の故事とは別の建安七子に由来したものと考えられる。しかし、これらの題材の混同は、林氏が指摘されるように、室町中期の禅僧、季弘大叔の当時、既に確認されるものであり、その整理は容易ではない。例えば、竹と人物を配した画題で「竹林七賢図」と混同しやすいものとして、『後素集』にも収められる「竹溪六逸図」が挙げられる。唐代、竹溪に集った李白を始めとする六人の酒友の故事に取材したもので、雪村筆や利光筆等、酒を酌み交わすような「竹林七賢図」の構図は、「竹溪六逸図」との混同、或いは援用の可能性も考えられるであろう。

現在、確認できる「竹林七賢図」は以下の通り。

- 01 竹林七賢図 図録 襖絵 雲谷等顔
竹林七賢594 大徳寺黄梅院蔵・京博寄託
- 02 竹林七賢図 屏風絵集成4 屏風 伝
狩野元信 竹林七賢594 東博蔵・商山四皓図と一双
- 03 竹林七賢図 屏風絵集成4 屏風 狩
野探幽 竹林七賢594 静岡県立美術館蔵・香山九老図と一双
- 04 竹林七賢図 國華 襖絵 狩野山雪
竹林七賢594 妙心寺天球院
- 05 竹林七賢図 図録 軸 狩野秀頼
竹林七賢594 山口県立美術館
- 06 竹林七賢図 屏風絵集成4 屏風 雪
村 竹林七賢594 畠山記念館蔵
- 07 竹林七賢図 図録 軸 利光 竹
林七賢594 常盤山文庫・右幅のみ
- 08 竹林七賢図 屏風絵集成4 屏風 啓
孫 竹林七賢594 一隻・東博蔵
- 09 竹林七賢図 屏風絵集成4 屏風 狩
野常信 竹林七賢594 法然寺蔵
- 10 竹林七賢図 屏風絵集成4 屏風 狩
野安信 竹林七賢594 聖衆来迎寺蔵・商山四皓図と一双
- 11 竹林七賢図 屏風絵集成4 屏風 狩

野安信 竹林七賢594 三時知恩寺蔵
・李白觀瀑図と一雙

12 竹林七賢図 屏風絵集成4 屏風 長
谷川等伯 竹林七賢594 建仁寺兩足
院蔵

備考「竹林三老図」(雪村)・祥啓筆双幅(狩野家
縮図)

参照2 『後素集』聖賢部・本文校訂例

黄帝垂龍図

(国会A)鼎湖諫丹 給フ丹成テ復龍来テ 黄帝
(芸大本)鼎湖練丹ヲ給フ丹成テ後龍来テ 黄帝
(東博本)鼎湖諫丹 給フ丹成テ復龍来テ 黄帝
(京府本)鼎湖諫丹 給フ丹成テ後龍来テ 黄帝
(狩野A)鼎湖諫丹 給 丹成 後龍来 黄帝
(筑波本)鼎湖練丹 給フ丹成テ後龍来テ 黄帝
(東大本)鼎湖練丹給ふ丹成て後龍来つて黄帝
(島原B)鼎湖練丹 給ふ丹成て後龍来つて黄帝
(島原A)鼎湖練丹 給ふ丹成て後龍来つて黄帝
(狩野B)鼎湖練丹 給ふ丹成て後龍来つて黄帝

(国会A)ヲノセテサル七十余人ノ臣下龍ノヒゲ
(芸大本)ヲ乗テ去ル七拾余人ノ臣下龍ノ髭
(東博本)ヲノセテサル七十余人ノ臣下龍ノヒゲ
(京府本)ヲ乗セテサル七十余人ノ臣下龍ノヒゲ
(狩野A)ノセテサル七十余人ノ臣下龍ノヒゲ
(筑波本)ヲ乗 テ去ル七拾余人ノ臣下龍ノ髭
(東大本)を乗 て去 七十余人の臣下龍の髭
(島原B)を乗 て去 七十余人の臣下龍の髭
(島原A)帝を乗 て去 七十余人の臣下龍の髭
(狩野B)を乗 て去 七十余人の臣下龍の鬚

(国会A)ニトリ付 昇 レ共 ヲチテ 上 事
(芸大本)ニ取付 昇 レトモ髭 ヌケテ登 ルコト
(東博本)ニトリツキ昇 レトモヒケヌケテノホルコト
(京府本)ニ取付 ノボレトモヒケヌケテ昇 ル事
(狩野A)ニトリツキ昇 レトモヒケヌケテノホルコト
(筑波本)ニ取付 昇 レトモヒケヌケテ昇 ル事
(東大本)に取付 昇 れともひけ切 て
(島原B)に取付 昇 れともひけ切 て
(島原A)に取付 昇 れともひけ て
(狩野B)に取付 昇 れともひけ て

(国会A)ヲ不得
(芸大本)ヲ不得
(東博本)ヲ不得
(京府本)ヲ不得
(狩野A)ヲ不得
(筑波本)ヲ不得也
(東大本)不得昇
(島原B)不得昇
(島原A)不得昇
(狩野B)不得昇